

筒井康隆「虚人たち」論

—メタフィクションがもたらす「彼」の主張—

松山哲士

はじめに

筒井康隆「虚人たち」は、『海』（中央公論社）で一九七九年六月（第一一巻第六号）から一九八一年一月（第一三巻第一号）にかけて連載された長編小説である。初版本は中央公論社から一九八一年四月に発行された。また、第九回泉鏡花文学賞受賞作である。

本作品で描かれるのは、妻と娘を同時に別々の犯人に誘拐された主人公「彼」が、その救出に向けて彷徨する様子である。その過程で、息子や通り返りの男、会社の同僚といった様々な登場人物と関わるが、「彼」も含めた全ての登場人物は、虚構世界の中に存在することを自覚している。筒井は「虚人たちはメタ・フィクション」だと指摘している。¹メタフィクション

とは、『集英社 世界文学大事典』²によると、「フィクション批評を内在させたフィクション」、「読むこと／書くこと／語ることの本質を問う自己言及小説」とある。このメタフィクション性が「虚人たち」に独特な世界観を創造するのである。

先行研究においても、本作品の特異な形式が注目されてきた。三浦雅士は『「虚人たち」の登場人物はすべて、小説に登場すると同時にその小説について批判的に語る人物であり、「進行してゆく小説について語りながら小説そのものを進行させてゆくことが基本的な主題である」と述べる。³さらに、「虚人の自覚は、書くことが書くこと自体を意識することに等しく、それは「小説が小説を意識するということであり、すなわちこの小説が小説についての小説にほかならない」とも言及する。⁴また、奥野健男は「作者によってつくられた小説の登場人物の

眼から、小説という欠陥だらけのゆがんだ宇宙を、逆に眺め、そこで生きるおかしさを描くという発想」を称賛している。⁽⁵⁾

メタフィクションという言葉が直接使用されて論究されたのは、近年になってからである。井口時男は本作品を「筒井康隆のメタ・フィクション小説」と称し、「その「虚構内存在」が抱く自意識、現実と信じる者が虚構なのではないか、この自己さえも何者かによって演出・編集されているのではないか、という疑いを方法化」したと論じる。⁽⁶⁾ また、佐々木敦は「これは小説（虚構）である」という端的な事実と現実を前面化／全面化し、そのこと自体を主題としている小説、すなわち「メタフィクション」である」と指摘し、⁽⁷⁾ 作品の結末に進むにつれて「徹頭徹尾フィクションでしかない何かの、どこにも存在していない筈の情動が、そこに立ち上がってくる」点から、「メタフィクション」の歴史的名作である」と評す。⁽⁸⁾

これらの論考は、登場人物と作者（筒井）、登場人物と虚構世界との関係や、作者が小説を書くという行為に言及することで、「虚人たち」という小説世界の特殊性をその形式面から明らかにした。しかし、このような特殊な世界の中で、虚構世界を自覚したメタフィクション性を有する登場人物が描かれ、その人物同士が関わり合うという「虚人たち」の物語そのものに

対しては、考察の余地が残されている。今一度「虚人たち」の形式だけでなく、物語内容にも着眼することにより、作品の主題を再検討できるのではないだろうか。

そこで本稿では、登場人物と関わり合うことでもたらされる主人公「彼」の思考を分析し、物語の中で提示される「彼」の主張を考察する。「彼」の主張からは、登場人物にメタフィクション性が付されている意味と、それが「虚人たち」という虚構世界に与える影響が分かる。最終的には、「虚人たち」におけるメタフィクション性の意義を論ずる。

一、登場人物のメタフィクション性

本作品に登場する人物は特殊な性質を持つ。このことは、筒井自身が多くのエッセイで言及している。本章では、物語の理解へ繋げるために、筒井の論考を取り上げながら、主人公「彼」をはじめとする「虚人たち」の登場人物や、作品世界の特徴を整理する。

そもそも筒井はどのような意図でこの物語を描いたのか。前述のように、筒井はこの作品を「メタ・フィクション」と述べているが、このメタフィクション性について、後年になってか

ら「今までの小説の省略のしかたを批判した」と指摘した上で、次のように言い及ぶ。

虚構と現実を考えたときにですね、一般に小説といわれているものの中に、おかしいところがいつばいあるんじゃないかと思った。現実と食い違う虚構とか、あるいは虚構の中でしか実現できない虚構とか、そういうものができるとはんじゃないか、最初考えたのはそういうことでした。それで時間であるとか人物であるとか、キーになる項目を十ヶ所くらいメモして、それから考えはじめました。⁽⁹⁾

この「キーになる項目を十ヶ所くらいメモし」たものが、エッセイ「虚構と現実」である。「虚構と現実」は、一九七九年一月から九月に『野性時代』で連載された。筒井は「時間」「社会」「人物」「着想」「事件」「風景」「場所」「性格」「虚構」の九項目から、従来の小説の表現技法への疑問を示し、虚構の独自性を表現できるような新たな技法を理論にしてまとめた。筒井は「考えをまとめる為に「虚構と現実」を書き、書く過程で「虚人たち」という長編の構想がまとまりはじめた⁽¹⁰⁾」としており、佐々木敦も「虚構と現実」は『虚人たち』の創作ノート、筒井康隆の「小

説「虚構論」の「理論編」として書かれている⁽¹¹⁾」と指摘することから、「虚構と現実」は「虚人たち」の構想と密接に関係すると言える。

特に「人物」の項目は、本稿で取り上げる、メタフィクション性を有した登場人物を捉える上で重要である。筒井は、小説で描く人物の性質について、このように述べる。

小説内での架空の人物は真に小説内での架空の人物として描かれねばならず、ひとつの小説の中で複数の人物は主人公や脇役の区別なく虚構内存在しなければならぬ筈である。虚構中の人物を現実の人物と同じように描写することが不可能であることを厳然とした事実として認めた上で、さらに演劇という虚構中の人物と同じような虚構内存在にしようの徹底に避けることによつて現代小説の実作者は新しい虚構内存在（この場合は作中人物）の創造ひいては新しい虚構の形式の発見に到るのではないだろうか。⁽¹²⁾

小説は現実世界や、同じく虚構を表現する演劇から独立すべきであることを、筒井は強く主張する。それにより、「新しい

虚構内存在」としての「作中人物」を創造でき、「新しい虚構の形式の発見に到る」。小説内の登場人物の性質は、「虚構の形式」に重大な示唆を与えるものである。

この設定をめぐっては、「虚構と現実」のみならず、その後も継続して主張している。例えば、「虚構と現実」が発表された二年後の、本作の連載が終了した七ヶ月後の松田修との対談の中で、筒井は次のように本作品の登場人物の性質に言及する。

ただ主人公一人だけ出てきたのでは話にならないから、一時の脇役として出てきているんだけど、それぞれ自分の物語を背中に背負っているわけです。これは現実では当たり前なんです。ただ、現実の人間は、この場では自分は脇役だとわきままえている。

では虚構の場合というと、つまりそれは、主人公同士のおつかり合いということになる。そういったおもしろさをねらったということ。¹³⁾

つまり、本作の主人公「彼」は「虚人たち」の物語を背負い、「彼」以外の登場人物は、別の物語を背負いながら、「虚人たち」の物語に参加している。そして、登場人物全員が、自分こそ主

人公であるかのように振る舞うため、「ぶつかり合い」が生じる。この一ヶ月後のエッセイにも同様の主張があるため、そちらも参照しながら検証する。

現実以上に虚構の独自性を主張しなければならない小説では、いつそのこと、自分こそ小説の主人公だと自覚している人物ばかりを登場させたかどうか。現実と同じく、登場人物すべてが自分のそれぞれの物語の主人公であるという小説、当然その場合は、作中人物すべてが自分は小説の中の登場人物であると自覚していることになりませんが、そういう人物ばかりを登場させたかどうかと、そう考えました。¹⁴⁾

「自分こそ小説の主人公だと自覚している」とは、すなわち「自分の物語を背中に背負っている」ことを意味する。「虚人たち」の世界では「彼」が主人公の役割を担い、他の登場人物は「虚人たち」とは別の、自らが主人公となる虚構世界に属している。そして、その世界の特質を持った状態で、「虚人たち」の物語に巻き込まれている。さらに、その登場人物は、「虚人たち」が現実とも異なる世界であることも自覚している。それでも、自身が物語の主人公であるという主張は崩さない。このよ

うに、登場人物によって虚構世界への意識が異なり、決して「虚人たち」の世界に従属するものではないため、価値観を互いに譲らない「主人公同士のぶつかり合い」が発生する。このような設定から物語が進行し、登場人物同士が関わり合うという構図は、メタフィクション性を持つ作品内容を解釈するうえで注視すべきである。また、これらのエッセイで述べられた、登場人物の「虚人たち」への関わり方をめぐっては、この二〇年後となる二〇〇一年においても同様の言及があり、筒井が重視した構想であったことが窺える。¹⁵⁾

以上より、「虚人たち」の登場人物の特質は、筒井による綿密な理論によつて説明ができる。それは、登場人物は全員、自身が主人公となる虚構世界をそれぞれ背負い、「虚人たち」の世界の中では全員が、自分こそ物語の主人公だと主張するものである。そして、この設定を登場人物全員が自覚しているために、作中では登場人物同士の衝突が起きる。それにより「新しい虚構の形式の発見に到る」と筒井は考えている。この考えが、「現実とは食い違い」、「虚構の中でしか表現できない」虚構を表すメタフィクションになる。

では、このような特性が付された登場人物は、「虚人たち」の物語において、どのような関係性を見せ、物語の展開や主題

へどのように影響するのだろうか。次章から本文を分析し、主人公「彼」と他の登場人物との「ぶつかり合い」から作品の主題を検討していく。

二、作品世界の認識をめぐる衝突

まず、主人公「彼」の性質から見る。特筆すべきは、「虚人たち」の物語の進行は、「彼」にかかっているということである。本作は三人称視点の語りで進行するが、その内容のほとんどが「彼」の視点に拠っている。「彼」は物語の中で、自分が「虚人たち」の主人公であり、妻と娘が誘拐されている状況の中、その救出に向けて物語世界を彷徨することが求められていると理解する。そして、自身の言動により「虚人たち」の物語を展開させることができると気づく。その自覚は次のように記される。

彼は責任を感じている。それは常に事態をいずれかの方向へ進行させ続けていなければならぬ責任でありその責任感が自分の上位自我ではないかとも彼には思える。

この「責任」の自覚によつて、「彼」は「虚人たち」の物語

を「進行させ」るために主体的に行動するようになる。先行論でも指摘があり、井上ひさしは「作者の用意したのは状況と他の登場人物だけであり、主人公はたえず手探りで」物語の状況を「機敏に察知してゆかねばならない」という特性を述べているが、⁽¹⁶⁾ここには本作品における特殊な時間概念も関与する。

筒井は本作品で取り入れた時間について、「時間を全然カットしないで書」き、「四時間半を全部描写するという小説で」とあると指摘している。⁽¹⁷⁾実際に本作品の世界では、時間の省略が行われておらず、原稿用紙一枚で一分間が経過する。⁽¹⁸⁾それは、「彼」が何らかの言動や思考を続けられない限り、「虚人たち」の物語が進行しないことを意味する。つまり「彼」は、自らの言動によって物語を進展させるといふ重責を抱えているのである。ただ、「虚人たち」では実験的な表現技法を多く用いていることから、他の登場人物は、物語を進行させる「彼」の描写に違和感を覚えることも多く、衝突が起きる。「虚人たち」に登場する人物は、自身の立場や世界を主張し、自分こそが物語の主人公であると訴え、自身の属する虚構世界と「虚人たち」の世界とを比較し、「彼」を批判する。

このような物語の設定をめぐっては、これまでも論じられてきた。平石滋は「他者や他の物語との対比の中から、差異を

明確に際立たせあるいは共通点を見出すことで、主人公が果たすべき役割・役割・望まれる物語の展開のみならず、虚構世界へ向けてのあたらしい方法論を探り出そうと」している⁽¹⁹⁾と示す。また、木野光司は「まったく別の虚構世界の「虚人」たちが、「虚人たち」の小説世界に迷い込むこと」に対して、「小説の筋の「単一性」のみならず、小説世界の「閉鎖性」をも放棄する小説」というこの構想はナラトロジー的に非常に興味深いもの」だとする。⁽²⁰⁾しかし、これらの論考も物語形式の指摘であり、その形式によって物語に何がもたらされるのかは論じられてこなかった。特に「彼」と激しく衝突する人物に、「彼」の息子、通り返りの男、「彼」の会社の同僚が挙げられる。この三者との関係性や、「彼」が三者に対して取る態度から、「虚人たち」の中で、属する虚構世界の異なる人物が多様に描かれる意義を考証していく。

本章では、「彼」と息子との関係を見る。「彼」と息子とは、物語の主軸である誘拐された妻と娘（息子にとつての母と妹）の救出に対する態度で不和が生じる。例えば、「彼」が息子に妻と娘の捜索への協力を求めた時、息子は次のように言い放つ。

これはお父さんの事件なんだ。責任逃れで言ってるんじゃない

なくて実際その通りなんだから。一緒に来てくれつつい
うけどぼくがお母さんや弓子を捜そうとするのをお父さん
が手伝ってくれるんじゃないとお父さんをぼくが手伝うんだ
からね。(中略)学校の事件にならばくは責任を持つている。
事件の最初からかわりあっているんだしぼくがいなければ
起らない筈の事件だったんだからね。お父さんの方にし
たって同じことだろう。お父さんがいたからこそ起り得た
事件じゃないのかい。

ここでは明確に、「彼」と息子との間で生きている世界の異
なることが示される。「彼」の妻と娘を捜索することは、あく
まで「彼」が主人公となる「虚人たち」の世界での出来事なの
である。息子にとっては、たとえ母と妹にあたる人物であつて
も、自らの属する世界とは何の関係もない、余計な事件に巻き
込まれるという認識になる。息子は、自らが関わる「学校の事
件」を優先しようとしており、「学校の事件」が存在する息子
自身の虚構世界から、「虚人たち」の事件の解決に無理やり協
力させられる。

さらに、「彼」と息子の対立は、物語の叙述にも及ぶ。既述
の通り、「彼」は自らの描写によって「虚人たち」の物語が進

行することを自覚し、原稿用紙一枚で一分間が経過するという
物語時間を進めるため、何事に対しても綿密な描写を行う。そ
れに対して息子は、妻と娘の捜索を最優先するため、時間を経
過させるためだけの、事件の解決に何の連関もない内容を描出
することに苛立ちを隠せない。この苛立ちは、作品の「日常性」
の捉え方にも向けられる。「彼」は時間を省略できないことも
関係し、妻と娘の捜索中であつても、空腹を感じればレストラ
ンで食事を取り、眠気を催せば捜索を中断して睡眠を取る。し
かし息子は、これらの行動も妻と娘の救出に繋がらないとして、
「彼」への不満を募らせていく。その様子を「彼」は次のよう
に把握する。

父親が寝ると言い出すであらうと自分が予想していたこと
を息子はよく承知している。それは息子にとつても彼に
とつてと同様当然の成り行きではあったのだからが大きく
異なる点は息子が彼のように眠くなれば眠るべきだと考えて
はいずそもそも眠くなるべきではないと考えているところ
にある。眠くなるなどという日常性に考えも及んでいな
かつたといふべきかもしれない。⁽²⁾

ここでの息子は、「彼」の言動を否定する存在として描かれる。つまり、本作品における息子の役割は、「虚人たち」の特徴的な描写を強調させるために、自身の属する虚構世界から、「彼」の描写に対する反発を示すことだと言えよう。²²⁾

そして、「彼」は息子との衝突を通して、次のような思考に至る。

今までのいきさつから推測すればもしかすると現実との乖離そして自立の可能性を試みるこそ自分にあたえられた使命かもしれないと彼は思いはじめているのだ。だが息子はどうか。息子が彼と同じ意味で自立を主張しているのではないことはあきらかだし息子が現実との乖離を望んだりする筈もないと彼は思う。息子はやはりあくまで自分の世界が現実の世界との同一類概念に包摂されたままの世界であることを望んでいる筈だ。

ここで、「彼」が自覚した「現実との乖離そして自立の可能性を試みる」という目的は、筒井がエッセイで述べた「虚構内存在であることを自覚」し、「新しい虚構の形式」や「虚構の中でしか表現できない」ものを発見しようと試みることと同義

である。この一連の場面は、「彼」と息子が互いの虚構世界を批評し合う、メタフィクション的構図が取られている。その構図が原因で、息子との衝突が起きたのである。

このように、物語の進行に対する態度で「ぶつかり合う」「彼」と息子との関係性は、それぞれの虚構世界の認識の差異が示されるだけでなく、「現実との乖離そして自立の可能性を試みる」という「彼」の目的も明示されるものとなった。その目的は、この後の物語の展開において、どのように作用するのだろうか。

三、「虚人たち」の独自性への葛藤

次に、「彼」と通りすがりの男との関係性を見る。通りすがりの男は、「彼」の息子が物語世界から逃走した後に登場する人物で、「彼」を車に乗せて、妻と娘の捜索に協力する。男と「彼」とは、特に虚構世界の中で経過する時間の捉え方が異なる。「彼」の世界、すなわち「虚人たち」の世界では、既述の通り経過する時間が一切省略されないのに対し、男の世界ではそのようなことがない。その違いを「彼」はこのように悟る。

もともと厳密な意味では現実の時間だって均質性や恒常性

を持つてはいない。(中略) しかし彼はそれにもかかわらず実験的にできるだけ物理的時間へ近づこうとしている。一方それとは逆に彼は直線的なクロノスの時間⁽²³⁾を時おり完全に無視している。この男はそうではあるまいと彼は思う。時間の省略などという言葉をことさら持ち出すのは直線的クロノスの時間を信じているか又は信じていないまでもこだわっているからに違いない筈だと考えられる。

「彼」は「物理的時間」に近づいた、時間の「均質性や恒常性」を持つために精密描写をするが、男はその時間の特性を「まったく無視し」、何も言動をしなくとも自然と時間が経過する「直線的なクロノスの時間」を生きている。そのため、物語の進展に連関がない場面は、男の世界では描写しなくてよい。そして「彼」は、そのような男の世界における時間の性質に「羨望を感じ」つつも、「虚人たち」の時間と、男の時間との差異を分析し、「できるだけ物理的時間へ近づこうと」する「虚人たち」の世界を理解していく。

このような差異が認識される、「彼」と通りすがりの男との関わり合いにおいて重要な点は、「彼」が物語内の人物でありながら、「虚人たち」の世界の独自性をどのように表現すべき

かを思量し、特質の異なる虚構世界と接点を持つことの面白さを明示しようとする点にある。例えば「彼」は自らが属する「虚人たち」の世界と現実世界との違いについて、次のように思索する。

彼はまた自分が自分独自の明確な世界を他から区別しようとする行為そのものがどうしようもなく現実⁽²⁴⁾に近づきつつあることを知ってうろたえる。現実においてもまた他人の事件に知らずしらず捲きこまれいつの間にか自分を見失っている場合が多いからこそそたいていの人間がそれを避けようとするのではなかったか。もしかするとそういうことを避けようとするのをこそ彼は避けなければならぬのではないか。他人の事件であつても起つたことは起つたこととしてあるがままに受け入れなければいけないのではないか。しかしそういう処世観を持った人物さえやはり現実にはいる。

「彼」はこの時点で、現実世界とも、男が生きる虚構世界とも、「虚人たち」の世界が異なることを認知しており、「自分独自の明確な世界を他から区別しようとする」。しかし、どのように

考えても、「虚人たち」の目的として提示されていた「現実との乖離」や「自立の可能性」を表現するには至らない。それどころか、むしろ現実世界に近づいてしまうことに気づき、「彼」は途方に暮れる。確かに、「彼」が思案するように、現実世界においても様々な価値観をもとに自身の言動を選択する人物が存在する以上、現実から完全に乖離した虚構世界特有の人物を描くことは不可能と言えよう。だが、この場面は、「虚人たち」の独自性を主張できないという葛藤を物語内の主人公が抱え、その葛藤から超克しようとする試みたり、作中人物の側から「虚人たち」の世界を特殊なものへと導こうとするために自身の虚構世界を内省したりするという、メタフィクション性をそなえてある点が重要なのである。

さらに「彼」は、異なる虚構世界に属する他者が「虚人たち」の世界に関与することをめぐって、次のような印象的な示唆をもたらず。

たいいていの人物は自分とは違った役割役割を羨むことがある。だが実際に役割役割を變更させられそうになると誰もがしり込みしたい気に襲われることも彼は知っている。(中略) 私小説的環境にいた人物が冒険小説世界にとびこむこ

ともさまざまな無理が伴う。まさにそうしたところその面白さを生み出す場合の重要な一手法であるにかかわらずそれは環境にとつてはその世界が否定され各人物にとつては自己の存在そのものが攻撃を受けかねないというので互いに避けあうのだが彼は無責任にもそういうことだつてあつて当然ではないかと思つてゐる。

つまり「彼」は、「虚人たち」の世界とは異なる虚構世界を背負つた人物が作中に登場するのは、その中で「自分とは違つた役割役割」に変更することによつて、物語に「面白さ」が生み出されるからだと言張する。しかし、その「面白さ」は、その人物が元来属している世界や自身の価値観が否定されることにもなり、容易には達成されないことも同時に指摘している。事実、「彼」と通りすがりの男との関係においては、「彼」の視点からその隔たりが示されるだけに留まり、両者ともに「自分とは違つた役割役割」へ至ることはなかった。それでも、このような主張が物語内の人物によつてなされる点は注目に値する。

このように、通りすがりの男の世界は、「彼」の息子と同様に、「虚人たち」の世界の性質にあてはまらない。むしろ、通りす

がりの男独自の虚構世界が描き表されている。その価値観に「彼」が触れることにより、「彼」は異なる虚構世界に属する人物が「虚人たち」に登場する意義を考える。そして、「虚人たち」とは異なる虚構世界を迎合するために、自己の役割を考えていくことこそ、「虚人たち」の世界における「面白さ」だと「彼は気づき、物語の中で提示する。すなわち、「虚人たち」の完成を目指す「彼」と、自分独自の虚構世界を背負う登場人物の双方が、互いにぶつかり合い、批判し合いながら、「虚人たち」をより高次なものにするという、メタフィクション性が十分に發揮されているのである。

四、虚構世界の自覚から生まれる主張

最後に、「彼」と会社の同僚との関係性を見る。作中における最後の対立であり、最も激しく口論を交わす場面である。同僚は、自分がどのような役割で「虚人たち」に登場しているのかを、自ら明らかにしようとする。その様子は、登場時の次のセリフから窺い知ることができ、メタフィクション性を持つ。

木村君（引用者注、「彼」）を失脚させたいと思っている人

物だと想像できるんですよ。つまりこの局面におけるこの私という人間がね。だけど本当のところはどうすればいいのかよくわからないのです。そもそも木村君はあそこにいる前です。わたしはここにいます。わたしが木村君のいる前で今のようなことを言うわけがない。現実にはね。しかし言っておかないことには私は自分がどういう人間であるかを表現したことになる。

続けて同僚は、「彼」が「虚人たち」の中で関わる、妻と娘が誘拐された事件について、自身の立場を主張する。同僚は、「君の家族の身の上で起っている事件についてわれわれは何ひとつ知らないことになって」おり、「君の奥さんと娘さんが別べつての犯人に同時に誘拐されたなどという非現実的でありながら現実的な調子のいい事件をもし知ったとしたら困ってしまう」のである。

ここから、同僚は他の登場人物と同様に、「虚人たち」とは異なる虚構世界に属し、「虚人たち」の世界では「彼」の会社の同僚という役割を担わされていると分かる。そして、「虚人たち」の物語内容を把握しながらも、与えられた役割の中では、その内容を認知していることを不適切だと判断する。そのため、

直接「彼」に語り掛けることで自身の置かれた状況を確認しながら、同僚という役割の、本作における振る舞い方を模索していく。この性質は、他の登場人物にはない特徴的なものである。このような同僚の態度に対して、「彼」は次のように怒りを表明する。

無責任なんだよ。他人の事件にかかりあう時は自分のどういう行為が期待されているかよく調べなきゃいかん。そりゃまあ早合点早とちりが本人の個性であるならしかたがないよ。そうした個性が期待されているのかもしれないのだからな。しかしその早合点早とちりは事件の進展を妨害し複雑化させるにとどめておいてほしいもんだ。こちらの主体性が那邊にあるかを自分の判断だけで決めつけるのはよくない

同僚にとって「虚人たち」の物語は、特別に重視しない虚構世界だが、その物語内容に関わるからには、自らの役割を適切に把握し、その責任を果たすべきであると「彼」は主張する。故に、「彼」に語りかけるだけで自身の役目を示そうとする同僚の言動は「無責任」であり、「彼」は激怒する。この「彼」

の主張に対して同僚は反論し、物語における主人公という存在をめぐって、次のような口論を交わす。同僚のセリフに始まり、「彼」の返答が続く。

「(中略) 万一この会社がぼくのひのき舞台であったとして見なさい。君はこの舞台では端役だよ。その場合ぼくと部長がこの舞台における最重要人物としてのダイアローグの最中に君が出てきて邪魔しはじめたことになりやしないかね。(中略)」

「端役であるか主人公であるかは問題外だろう。現実には端役などという人物が存在するかい君。全員が主人公なんだ。(中略)」

この諍いから同僚は、虚構世界には主人公と端役が存在し、視点の違いによってその関係も変容すると考えていると分かる。それに対して「彼」は、虚構世界の中では「全員が主人公」であると明言し、「端役」という存在を否定する。つまり「彼」は、登場人物の「全員が主人公」だと認めたくうえで、存在する世界の状況に合わせて自らの役回りを判断することが、虚構世界における登場人物の責務であり、自らの属する世界とは異なる

る虚構世界との適切な関係性だというのである。すなわち、「虚人たち」の世界の確立を目指す「彼」と、独自の虚構世界を持つ登場人物は、あくまで対等の立場で責任を自覚し、互いに批評し合いながら、「虚人たち」という物語世界を高めようとするメタフィクション性が示されるのだ。

そして「彼」は、同僚と激しく口論を交わした後、次のような思考に至る。その思考は、同僚と関わる以前にも、「彼」の息子や通りすがりの男と「虚人たち」の世界における自らの立場をめぐって対立したことも関係してくる。

ありとあらゆる人物の混入や多くの別ジャンルの世界の流入を凝視することも自分の務めではないかと彼は想像する。そうした異質なものをこの世界へどの程度違和感なしに組み込めるかが自分に要求されている技術ではないのか。

ここで「彼」は、「彼」に対して激しく反発する同僚を排除するのではなく、同僚の世界を「虚人たち」の世界に組み込むことが、自らの役割だと理解する。この姿勢は息子や通りすがりの男と関わった時にも実践していたことであり、「虚人たち」

に虚構世界の独自性を構築する上で重要なものとなる。つまり、自らの属する世界の中だけで物語を構成するのではなく、他の虚構世界を否定せずに受け入れることにより、「虚人たち」の世界をより完成度の高い特殊なものにできる。したがって、「虚人たち」の主人公である「彼」は、物語の中で現実世界とも他の世界とも異なる「虚人たち」という固有の虚構世界に存在することを自覚し、自らの言動で物語を展開させるのみならず、「虚人たち」の世界の独自性をも表現しようとした人物なのである。

また「彼」のこの自覚は、現実世界を理解しており、現実世界の側から虚構世界を生み出す、作者の存在も認識していると考えてよいだろう。その証拠に「彼」は、同僚と口論をしている際に次のようなセリフを述べる。

現実同様ここにもまた不可知論は存在するのです。われわれの言動の何が重要で何が重要でないかはわれわれには一概に決定できぬところがあるからです。つまり私たちの言動の本質は私たちの認識を超えたところにあるとする主張があってもかまわないことになります。

ここで「彼」が「われわれ」や「私たち」といった一人称複数
数を主語にしている点に注目したい。「彼」の言う「われわれ」
や「私たち」は、「虚人たち」に登場する虚構世界を自覚した
人物全員を指している。そして、「私たちの言動の本質は私た
ちの認識を超えたところにある」と主張する。つまり、「彼」
らの「言動の本質」は、「虚人たち」という虚構世界の内部に
はなく、「虚人たち」が虚構世界だと提示される現実世界にあ
るといのである。現実世界から「虚人たち」の世界を考察す
るといふ視点は、虚構世界に存在する「彼」らには把握できな
い次元にある。また、「彼」らが互いの虚構世界を批判するこ
とによって、「虚人たち」の物語が、誰も予測のできない高次
なものへと展開していくことも暗示される。

加えて、作品末尾では、誘拐された妻と娘を捜索し救出する
という物語の本筋は達成されず、両者ともに殺害される。それ
が原因で「彼」は自身の存在意義を見失う。その様子は次のよ
うにある。

今から行動しても無意味なことばかりだがもともと彼の行
動してきたことのすべてが無意味なことばかりではなかつ
たといえるのかと問われれば彼にはすべて無意味であった

としか答えようがない。だがそれは彼がそう思うだけだ。

しかし、「彼」の存在が「無意味」だったという認識は「彼」
が、そう思うだけ」であり、「彼」の認識を超えたところ、すな
わち現実世界から「虚人たち」における「彼」の言動を考究す
れば、決して「無意味」なものとはならない。「虚人たち」の
中で、虚構世界を自覚した登場人物同士が会話し、その様相が
描出されることにより、虚構世界から虚構世界に対する認識が
提示されるからである。したがって、「彼」が物語の中で他の
登場人物と関わる過程に重要性が認められ、作中人物の視点か
ら虚構世界に存在する登場人物の意義が表される点に、本作品
の意味を読み取ることができる。そこには登場人物が虚構世界
に存在することを自覚している、メタフィクション性が生きて
くる。

おわりに

本稿では、筒井が目指した小説のメタフィクション性によつ
て「虚人たち」にどのような主題がもたらされたのかを明らか
にするため、物語内において虚構世界を自覚した登場人物同士

が関わり合うことで生まれる主人公「彼」の思考を分析してきてた。

虚構世界に存在することを自覚するという登場人物の性質は、筒井が小説の新しい表現技法として理論にまとめたものである。「虚人たち」の構想のもととなった「虚構と現実」をはじめ、複数のエッセイで何度も述べることから、筒井が重視していた着想であると分かる。この着想を実践することで、現実とは異なる虚構の中でしか表現できないメタフィクション性が表れるのであり、「新しい虚構の形式の発見」に至る。特に、「虚人たち」においては、以下の三点が作品世界にもたらされた。

第一に、「彼」が「現実との乖離」と「自立の可能性を試みることを目指したことである。「彼」が背負う虚構世界、すなわち「虚人たち」の世界は、他の登場人物が属している虚構世界とは性質の異なるものであり、登場人物はその事実を自覚していた。第二に、「虚人たち」の独自性を容易に主張できないという葛藤を物語内の主人公が抱え、その葛藤を打破しようと「彼」が様々に思索したことである。「彼」は、作中人物同士が互いの虚構世界を批判し合うことで、「虚人たち」の世界をより高次なものにしようとした。第三に、「虚人たち」の独自性を示すために、「彼」は「ありとあらゆる人物の混入や多

くの別ジャンルの世界の流入」を行ったことである。各々の虚構世界を背負う登場人物は、あくまで対等の立場でその責任を自覚し、互いの世界を批評し合うことが重要なのである。

これらの三点は全て、現実世界や「虚人たち」の世界とは異なる虚構世界に属していることを自覚した登場人物と、「虚人たち」の主人公であり、物語の進行を司ることを自覚した「彼」とがぶつかり合うことで生じたメタフィクション性と言える。このように本作品は、登場人物同士のぶつかり合いから「虚人たち」という虚構世界をより完成度の高い特殊なものにしようとする、主人公「彼」の画策が描かれている。その言動や思考を現実世界から考察することにより、物語が展開していく上で、作品に通底するメタフィクション性が重要な役割を果たすことが明らかとなる。

〔注〕

- (1) 筒井康隆「浸透——ふたたびSFの問題」(『SFアドベンチャー』第一〇号、一九八〇年九月)
- (2) 『世界文学大事典』編集委員会編『集英社 世界文学大事典5』、集英社、一九九七年一〇月
- (3) 三浦雅士「筒井康隆と個人主義の逆説——『虚人たち』

- を読む」〔『海』第一三卷第八号、一九八一年八月〕
- (4) 三浦雅士「小説形式への根源的な挑戦…筒井康隆著『虚人たち』」〔『波』第一五卷第六号、一九八一年六月〕
- (5) 奥野健男「『空間』の革命的抒情詩人」〔『国文学…解釈と教材の研究』第二六卷第二号、一九八一年八月〕
- (6) 井口時男「『実験』する少女、またはメタ・フィクションとしての『私』——静岡母親毒殺未遂事件」〔井口時男『少年殺人者考』、講談社、二〇〇一年四月〕
- (7) 佐々木敦「パラフィクション論序説…第3回『虚人たち』再読(その1)」〔『SFマガジン』第五三卷第八号、二〇〇二年八月〕
- (8) 佐々木敦「パラフィクション論序説…第4回『虚人たち』再読(その2)」〔『SFマガジン』第五三卷第九号、二〇〇二年九月〕
- (9) 筒井康隆、日下三蔵「筒井康隆自作を語る(第5回)『虚人たち』『虚航船団』の時代(前篇)」〔『SFマガジン』第五九卷第一号、二〇〇八年二月〕
- (10) 筒井康隆「知の産業——ある編集者」〔『SFアドベンチャー』第二卷第三号、一九八〇年六月〕
- (11) 佐々木敦「超虚構の時代…『虚人たち』(1988年)から

- 『文学部唯野教授』(1990年)へ」〔佐々木敦『筒井康隆入門』、星海社、二〇一七年九月〕
- (12) 筒井康隆「虚構と現実」〔『野性時代』第六卷第三号、一九七九年三月〕
- (13) 筒井康隆、松田修「対談・綺想多面体の解晶」〔『国文学…解釈と教材の研究』第二六卷第一号、一九八一年八月〕
- (14) 筒井康隆「『虚人たち』について」〔筒井康隆『着想の技術』、新潮社、一九八三年一月〕
- (15) 筒井康隆「超虚構性からメタフィクションへ」〔筒井康隆編『方法の冒険…21世紀文学の創造』、岩波書店、二〇〇一年二月〕において、「主人公とか脇役とかいった現実無視の設定をされている作中人物たちが、自らを虚構の存在と自覚していないわけはな」く、「虚構における『主人公』『脇役』の概念はなく、そこで描かれるのは自らを主人公であると疑わない者しか存在しない虚構世界の混乱状態である」としている。
- (16) 井上ひさし「文芸時評〈下〉」〔『朝日新聞』一九八一年四月二五日夕刊〕
- (17) 前掲(13)
- (18) 山下洋輔、筒井康隆「ジャズ・文学・80年代」〔『カイエ』

第三卷第一号、一九八〇年二月）や、松本忠夫、筒井康隆「筒井康隆さんと二時間」（『読売新聞』一九八一年二月一日）等で筒井が直接明らかにしている。

(19) 平石滋「虚人たち」における新技、決め技、ひねり技（『SFイズム』第二号、一九八一年一〇月）

(20) 木野光司「虚構性と物語性——筒井康隆『虚人たち』と『美藝公』——」（北岡誠司、三野博司編『小説のナラトロジー——主題と変奏』、世界思想社、二〇〇三年一月）

(21) ここで述べられる「日常性」についても、筒井は実験的な手法として取り上げる。その内容について、「虚構と現実」では、「日常に多い無為な時間もしくは食事、排泄といった行為をなぜ作中人物は現実の人間同様くり返すことがないのか」という初歩的な問題に立ち返ることにより、「今までの小説が省略してきた時間の中に小説の美学を発見すること」を目指す。そのために、「どうしてもいいこと」「本筋に（テーマに）関係のないこと」「美的でないこと」「退屈なこと」として省略されるこれらの時間を書いたのである。

(22) 拙稿「筒井康隆「虚人たち」論——対立存在との関係をめぐって——」（関西大学『国文学』第一〇四号、二〇二〇年三月）では、「彼」は「虚人たち」の世界をありのままに

受け入れようとしている存在であり、それに対して息子は、自分の世界ではありえない事柄が頻発する「虚人たち」の世界を否定する存在だと言えらる」と述べた。本稿のように「虚人たち」を「彼」の世界だと捉えれば、「彼」の精密描写は物語を進行させるために行われるものであり、息子が否定するものは「彼」の描写だという認識になる。

(23) 野中涼は『文学の用語』（松柏社、二〇一五年九月）で、「一定の速度で過ぎゆくだけの「自然の時間」を「クロノスの時間」としている。これを無視した「彼」の世界は、物語内を描写することでは、作品世界の時間は経過しない。

・本文の引用は『筒井康隆全集 第二三巻』（新潮社、一九八五年二月）に拠る。

（まつやま さとし／本学大学院生）

